

戦時下の暮らし(その6)

馬、そして軍馬

明治三〇年(一八九八)六月、屯田兵の入地以来、「馬」は開墾や農業経営、また、交通機関(手段)の少ない中で、物や人の移動に重要な役割を担っており、私たちの生活において欠くことができないものでした。

田畑で農作業をする馬、馬車や馬櫓ばそりを引く馬の姿、あるいは裸馬にまたがった人たちの姿が消えて、もう半世紀以上過ぎ、端野でも馬の姿を見ることができなくなりました。

端野で初めて飼育された馬は、明治二五年(一八八二)、中央道路(現在の国道三九号の前身)に設置された二号駅通(端野駅通、現在の国道三九号東一七号線付近)に、政府から支給された人や荷物を運搬する馬でした。

その後、同二九年に、屯田兵の入地のために中隊本部や兵屋の建築、道路の開削、橋梁の架設のための工事に馬が活躍し、さらに、屯田兵の入地後は、未開地の開墾、そして農作業、あるいは生産物の運搬や物と人の移動などにおおいに活躍しました。

端野における馬の飼育状況は、左表のとおりとなっており、その内容は端野村史(昭和二二年編集)に記されています。最も馬の飼育が多い時には、二千頭を超える馬が飼育されていました。

年度	牝(メス)	牡(オス)	計	年内生産頭数	飼育戸数
大正10年	622頭	198頭	820頭	-	-
大正14年	541頭	182頭	723頭	133頭	-
昭和5年	961頭	376頭	1,337頭	150頭	767戸
昭和10年	1,235頭	877頭	2,112頭	343頭	877戸
昭和18年	1,371頭	298頭	1,669頭	668頭	788戸
昭和20年	1,195頭	141頭	1,336頭	261頭	816戸

▲端野における馬の飼育状況

馬(牛)にも戸籍があった

大正一二年(一九二二)四月、「馬籍法」が施行され、飼育されている全ての馬は「馬籍」に登録することが義務化されました。

この登録は、飼育する人が在住する市町村役場となっており、私たちと同じく、出生、

死亡、移転等の変更があった場合速やかに市町村役場に届出しなければなりません。また、市町村は毎年馬の実態調査の義務も課されました。

この制度は、戦後昭和四四年(一九六九)まで継続され、その後は農業共済組合がこの業務を引き継ぎ現在に至ります。

馬の統制

昭和一四年四月、「馬統制法」が施行され、この法律の要旨は、左記のとおりで馬の種付は国の独占事業となりました。

記 馬の生産力を充実する方策として、優良な種牡馬・種牝馬を整備し、その配合を統制し種牡馬・種牝馬の登録と馬の種付事業を国の事業とし、さらに登録された種牡馬・種牝馬の移転は国の許可制とする。

具体的には、網走管内における種付統制業務は、北見種馬所(紋別郡遠軽町向遠軽)が、発足時に三一七頭の種馬を管内各市町村に派遣、あるいは貸付をし、各市町村は、派遣又は、貸付を受けた種馬により配合し優良馬の生産に取り組みました。

端野村では、昭和一四年に種馬を飼育する厩舎と種付所(現在の二区東方団地付近)を北見畜産組合端野支部が建築し、清水太一郎氏が責任者となり種付業務を行いました。

また、村内の六人(協和・伝国小氏、二区・茂利勇太郎氏・後野木由太郎氏、三区・竹倉作次郎氏・中村清信氏、北登・木村栄作氏)にも種馬を貸付し配合業務を行いました。

軍馬

馬が戦地に駆り出されたのは、明治二十七年（一八九四）の日清戦争からで、同三十七年の日露戦争、その後満州事変から昭和十六年（一九四一）の大東亜戦争までの間、戦場で軍需物資の運搬、銃砲の輸送、騎兵隊の主役として膨大な数の馬が駆り出されました。

日清戦争では、五万六千頭、日露戦争では一七万二千頭もの馬が戦場に駆り出されたという記録があります。

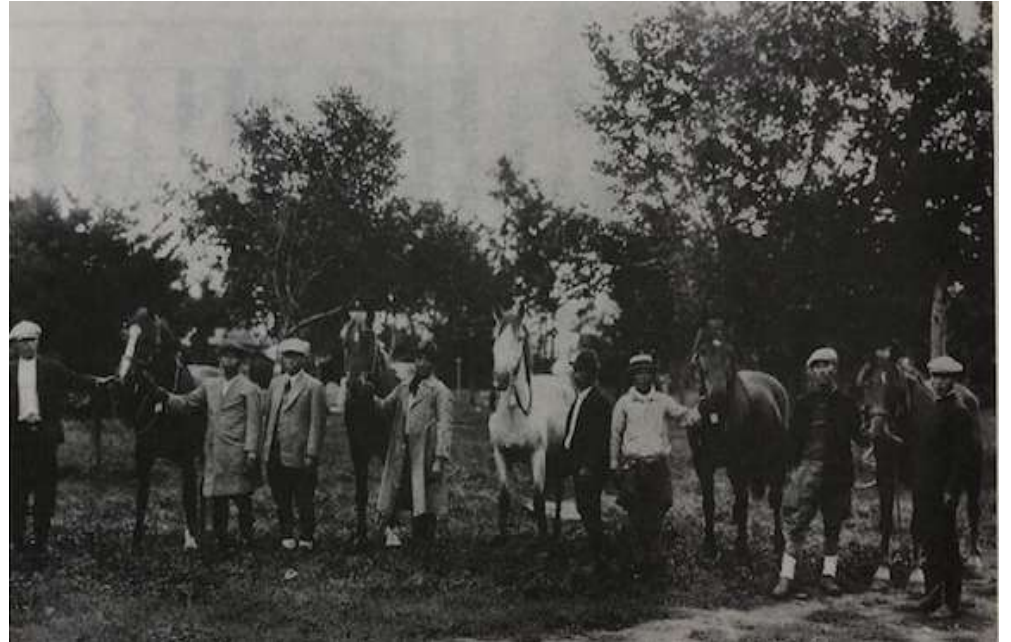
軍馬の徴発（買上げ）

軍馬の徴発ということは、陸軍省が高値で購入（買上げ）し、軍馬補充部で訓練したうえで各部隊（戦場）に送られました。

当時、軍馬の買上げは、野付牛町・美幌町・訓子府村で開催される馬市（せり）で行われました。

昭和一三年から一五年頃、通常の農耕馬は一頭八〇円から、九〇円程度の値段でしたが、軍馬として買上げの場合一頭五〇〇円もの値がつき、この価格は当時の農家一戸あたりの平均年収が千円程度でしたので、農家に限らず全ての馬の飼育者はこぞって優良馬の育成に努めました。

端野村から買上げになった軍馬の数は定かではありませんが、次の写真でみるように、かなりの数に上るものと思われれます。



↓野付牛（現北見市）馬市で軍馬に徴発（購買）された端野の馬（五頭）の野付牛公園付近での記念撮影

昭和一二年（一九三七）左から、土屋武さん、中田信夫さんとその馬、矢野清一さん（役場職員）、加藤久光さんとその馬、中村清信さんとその馬、寺島与次郎さんと沢井（三区）の馬、茂利力蔵さん、尾倉新一さんとその馬

なお、「端野の夜明け第四集（戦時下の村びと）」に当時の軍馬買上げについての談話が記載されていますので、参考までに記します。

*私の馬を軍馬に売ったのは、昭和一二年頃だった。

四〇〇円と記憶している。
苦しい百姓だったから、その時は本当に助かった。

（故北見市在住 加藤久光氏談）

*私の馬は、満州種牡馬として農林省に売ったが、軍馬には売れなかった。

馬は、北見市四条東の高台寺裏で開かれた馬市に軍馬補充部が来て高値で買っていた。

「馬喰ばくろ※」たちも競り合うが軍馬補充部（購買官）が約十倍もの値を付けて買っていくので、馬喰もこれには手が出なかった。

ところが、そのほかの馬のせりには、馬喰たちがぐるになって値を張らないから、馬鹿らしくて売る気がなかった。（故川向在住 中島八郎氏談）

※馬喰ばくろ本来は、馬のよしあしを見る人。

という意味で使われるが、ここでは、牛馬の売買あるいは、その仲介を生業とするもの。という意味で使われる。